

忽滑谷快天ノート (4) —夏期講習会¹と明治期の仏教事情—

金沢 篤

魚はとびはね、棉は育ち、
なんの不安もない夏の日々……²

はじめに

駒澤大学付置研究所の一つ禅研究所の所員に加えていただいてからも、もう随分になる。それ以来わたしは所員であることを常に誇りに思い、所員として恥ずかしくない活動を極力心がけてきたつもりだが、所員としての研究成果を、本誌、禅研究所年報に発表したことがなかった。機会はいつも与えられていたにも拘わらずである。何度も何度も挑戦するのだが、その都度メ切りに間に合わず、悔し涙を飲んで来たのである。そんなわたしがやっと発表出来たかと思っていたのだが、またしばらくお休みが続いた。所員としての活動は主として禅研究所の一つの業務である通常日曜毎に「大学の地域住民への奉仕」の一環として開催される「日曜講座」の、「坐禅」に続いてもたれる講義での講師を務めることである。多くのスタッフが動員されて交替で講師を務めるのであるから、年間わたしが担当するのはせいぜい数回ほどに過ぎないが、ほとんどが年輩者である 100 名足らずの受講生を相手に 1 時間の話をするのである。大学の学生相手の講義とはまた違った緊張を強いられるが、講義を聴く側の聴講生の意気込みの凄さに、毎回圧倒されるばかりである。日本人

¹ 奇異な表題に驚かれる読者もあろうかと思う。この表題は、松本文三郎氏の松本 [1911] 所載の「夏期講習會論」をお手本につけたものである。氏の念頭にある夏期講習会は、必ずしも「仏教」関連に限定したものではないようだが、今回わたしが本文でも触れるように、松本文三郎氏自身が夏期講習会の常連売れっ子講師であったことを思うと、感慨深いものがある。今日にまで続く、日本人の勉強好きの顕在化の淵源の一つをなすものとして、明治期のこの夏期講習会があるとわたしは考えている。また、金沢 [2013] 439 頁、及び同頁脚註 13 を参照のこと。

² 『乱歩賞作家 青の謎』(講談社 2004 年) 133 頁。

(2) 忽滑谷快天ノート (4) —夏期講習会と明治期の仏教事情— (金沢)

の多くは健全な仏教徒としての穏当な宗教生活の中にあると想像されるが、この日曜講座などに具体化する仏教徒ぶりは、ある意味驚異的である。仏教を学ぶ、仏教を教理的に学習する意欲が満々なのである。我が国に仏教が伝来してからかれこれ1500年ほどになるのだと思うが、国民が挙げて仏教をこのように学習するようになったのは、いつ頃からだろうか、と思う。わたしは、この他に、春季・秋季に開催される大学の公開講座やいわゆる「カルチャーセンター」などの講師を務める他、頼まれれば、何処にでも出かけて行って自分の専門の話をする。そうした経験を踏まえて言うのであるが、なんと日本人は勤勉で、何事にも深く興味を持って、その真面目な取り組みを持続させることだろうと思うようになった。一方で、「近代日本に於けるインド学・仏教学の成立と展開」という課題の下で、書誌学的な作業を継続しているわたしとしては、それらを具体化したのは、優秀な資質を持ち、明確な目的と幸運に恵まれた少数のエリートたちであったとの展望を持つに至っているが、そうしたエリートたちを育んだのは、そうした勉強熱心な仏教徒を多く擁する仏教社会であるとの展望である。そうした社会は江戸時代以前には考えられなかった。明治維新後の近代日本にあって初めて成立した状況であるに違いない。その際の一つのキーワードが今回の「夏期講習会」である。夏期講習会ブームは現代の日本人社会を特長づける社会現象であるが、それが近代日本に端を発していると考えているのである。したがって、この明治時代に起こった夏期講習会ブームの実態をうかがう具体的な資料を紹介することが、本攷の主たる目的である。とはいえ、実のところは、以下のような略略歴を持つ忽滑谷快天を夏期講習会との関わりで眺めてみたというだけのことである。うだるような夏空の下、売れっ子の名講師が講習会から講習会へと孤独に列車の旅を続けるという風景を如実に思い浮かべてみたかったというだけのことかも知れない。

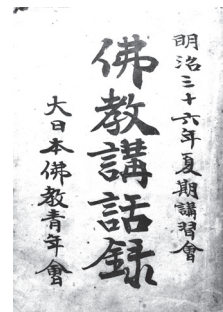
《忽滑谷快天略略年譜》

慶応 3(1867)年	誕生
明治17(1884)年	曹洞宗大学林入学、同 20 (1887) 年 3月同卒業
明治24(1891)年 1月	慶應義塾大学文学科入学、同 26 (1893) 年 12月同卒業
明治28(1895)年 8月	蓮光寺住職となる

- 明治29(1896)年 3月 東京曹洞宗高等中学林教授となる、同 32(1899)年 2月同辞任
- 明治33(1900)年[5月] 日置黙仙師に随行して暹羅へ佛骨奉迎に赴く[同年 7月帰国]
- 明治34(1901)年 9月 曹洞宗高等中学林監理兼教授となる、同 35(1902)年 9月同辞任
- 明治36(1903)年 9月 曹洞宗大学林英語講師の嘱託となる、同 44(1911)年 8月同辞任
- 明治44(1911)年11月 宗命により宗教及び學術視察の爲洋行、三年間欧米を巡錫する
- 大正 4(1915)年 7月 [日置黙仙師(&山上曹源氏) 世界仏教徒大会出席の爲米国へ]
- 大正 8(1919)年11月 曹洞宗大学教頭になる
- 大正10(1921)年 3月 曹洞宗大学学長になる
- 大正14(1925)年 1月 文学博士(東大)となる、同年 3月駒澤大学学長になる
- 昭和 9(1934)年 3月 駒澤大学学長を辞任、同年 7月 11日遷化

I. 夏期講習会

書物との出会いはいわば運命である。その書物との出会いがなかったならば、自分の今はない。と言っても、そうは大袈裟なものではない。古びた一冊の本との出会いがあったからこそ、この論放を執筆することになったというだけのこと。その書物は『明治三十六年夏期講習会 佛教講話録』(大日本佛教青年會編刊・明治 37 年) というものだが、その表題が語る通り、明治 36 年に行われた種々の「佛教講話」を収録した本³である。忽滑谷快天の「佛教



佛教講話録書影

³ 本攷附録【旧資料再録 3】にも明らかな通り、大日本佛教青年會によって開催された<第 12 回の仏教夏期講習会の講話録>である。この仏教夏期講習会についての近代日本仏教史の観点からの網羅的研究は、第 10 回、第 14 回、第 16 回、第 18 回、第 19 回、第 20 回、第 21 回、第 22 回の八冊の「関西仏教青年会の主催する夏期講習会の講演集」を踏まえている藺田 [1960]、大日本佛教青年会による第 6 回、第 7 回、第 8 回、と関西仏教青年会による第 10 回、第 15 回、第 16 回、第 17 回、第 18 回を

(4) 忽滑谷快天ノート (4) —夏期講習会と明治期の仏教事情— (金沢)

聖典論」と題された講話も、そこに収録されていたのである。だが、わたしがその書物に注目したのは、忽滑谷快天のその講話のせいではない。その書物が単に明治36年の夏に行われた種々の仏教講話を集めたものではなく、明治36年の夏に新潟の上越で集中的に開催された、夏期講習会での仏教講話を集めたものであるという点が重要である。100年以上も前に行われた仏教に関わる夏期講習会の貴重な生々しいドキュメントであったとしても、それがわたしの生まれ故郷で行われた夏期講習会の記録でなかったならば、おそらくわたしのパッションは発動しなかっただろう。わたしが幼少の頃でさえ、東京へ出向くのに、とてつもない時間を要したことをわたしは生々しく想起する。それよりもさらに50年も昔の日本である。そのようなまだまだ劣悪な交通事情の下に東京などの日本の中枢部で活躍している仏教者が、短期間に入れ替わり立ち替わりそうした辺鄙な地に訪れては、地元の仏教徒を相手に仏教講話を展開させていたということを具体的に告げるその一冊の書物の存在に感動したのである。わたしにとっての故郷を形作る具体的な固有名詞の数々を通して、インド学・仏教学がひたすら欧米やインド、中国などの海外への視点の下で成立し、展開していった風景を漠然と思い描いていた当時のわたしにそうした、国内の隅々への活動を顧慮する視点が生々しく生まれたためであった。

鎖国を売りにした徳川幕府による江戸時代が終わり、東京を中心とした明治維新が達成されて、まだ間もない頃の近代日本の営みである。そこには15人ほどの仏教者の講話が収録されている。島地黙雷、前田慧雲、村上専精、大内青巒、松本文三郎、新井石禅、齋藤唯信といったビッグネームと共に、忽滑谷快天などの名前が連なっているのである。この忽滑谷快天とはどのような人なのだろうか？ また、こうした「夏期講習会」を企画主催している「大日本佛教青年会」とは何なのか？⁴ これは

踏まえての藺田 [1960] を補足・修正した形の龍溪 [1987] の両者に譲る他ないが、その両者が扱っていない大日本佛教青年会による第12回の講話録に言及しているという点で、本攷は、その両者をささやかに補足するものと言えるかも知れない。が、この第12回についても、既に紹介が為されている可能性はある。近藤 [2009] も興味深い資料である。

⁴ 大日本佛教青年会と夏期講習会に関しては既に色々な資料が蓄積されていると想像されるが、境野 [1933] 526-527 頁にわたしは特に興味を引かれた。

わたしなどには「東大仏青」として馴染みの組織とどういう関係にあるのか？ なぜ、こうした仏教の「夏期講習会」が開催されるようになっていたのか？ 近代日本に先立つ江戸時代の仏教事情はどのようなものなのか？ 近代日本のインド学・仏教学の成立に直接的に関わる南條文雄や高楠順次郎といった面々については、わたしとしても既に何度も想いを廻らしてきた。そうした人たちとの関わりはどうであったのか？ 等々といった疑問が次から次へと湧いてきて、わたしの作業を逡巡させ、かと思うとわたしを闇雲な且つ性急な作業に駆り立てたのである。そして、わたしの作業にも何か展望が開けてくるようにも思われたのである。

わたしも夏期講習会に参加したことがあった。大学受験を控えた現役高校生を相手に予備校が計画した夏期講習会である。予備校の側から地方に出張ってきてくれたわけではなく、夏休み中の高校生が、わざわざ東京などの大都市に出かけて行って受講したのである。みんなが受講するから自分もと親を説得して出かけていったのだと思う。旅費や宿泊費や受講料という費用を捻出して参加するのだが、どれだけの効果があがったかは疑問である。わたしの場合は、人生の比較的早い時期に親元から離れて、自由気儘に一夏を過ごしたことに測り知れない意味があったと考えている。今でもそうした大学受験のための夏期講習会が盛況なのだろうか。また、受験ではなく、仏教の夏期講習会なども下火かも知れない。そもそも仏教の講習会は今や暇を持ってあました老人の専売となった観がある。したがって天候に恵まれ、時間的にも余裕のある「夏期」との限定は不要となったに相違ない。いつでもどこでも何の講習会でも開かれているというのが現代の実情かも知れない。そうした視点をもった上で、近代日本においてしばしば見られた、この仏教の夏期講習会について、さらに見てみたい。

平松理英氏の「青年諸氏の佛教を研究するは何の爲ぞ」が、佐々木 [1891] に収録されている。

「私が四月以來演説を止めしは沓に病のみならず我々が演説せしとて格別佛教擴張の爲になると云ふでもなく又諸君の爲になると云ふ次第もなしと云ふ考より止めしなり併し今日は會長辰巳君の勧め黙し難く言ひ度き俣を演説すべしとの約束で此演壇に上れり

私は前辨士の所謂偏僻家か知らねど私の考より見れば青年生徒衆が佛教を研究するは何の爲めかと思はれ是れ第一に尋ねんければならぬ近來佛教の話は一寸髯でも生したる人はいやでも知て居なければならぬ様になり恰も佛教は流行歌の如き有様であります何故に佛教は此様に世人の爲に弄ばるゝかと云と夫の井上園了氏が佛教は哲學と其規を同うすと云はれたるがそこで一方に哲學が流行出すと同時に一方の佛教哲學の道連れとして流行出すに至りまして肝心の井上氏は斯うは云はれざれど之に和する僧侶は佛教は哲學なりと他の付て呉れし印度哲學なる名前を自ら頂き佛教講義をするよりは印度哲學講義とする様になりました淺間敷ことではありませんか佛教は世間の名を負はざれば世に立つことは出来ませぬか、今日は天下到る所佛教青年會あるの有様なるが何故に斯く盛なるか思ふに是れ大概是夫の哲學てふ話より引込れたる者ならん公平に云へば哲學と佛教と密なる關係あるには相違ない併し之を以て直に佛教は哲學なりとしますれば到底佛教は「カントヘーゲル」の上に立つことは出来ません何ぜなれば固と佛教は覺りを下へ向ひて話した者で哲學は學者が下り上へ阻り上げた者である而して哲學は理學の實驗に由てをります佛教は此點には一步を譲らざるを得ませんされば佛教は哲學なりと云ふ者は釋迦を以て「カントヘーゲル」の草履取となすものであります縦し佛教は哲學に比肩するに足るとしましても青年諸君が差程貴重の時を費して研究する程の者とも云れませぬ國家第二の人民たる青年諸君が哲學研究に萬能の力を盡さるゝは蓋し國家の爲に危險のことゝ云はなければなりません

世の中は一の演劇で立役も必要なれば悪方も必要なり子役も必要にして立お山も必要なり學問亦斯の如くして哲學も必要なれば政治學も必要なり法律學も必要にして社會學も必要なり然るに青年諸君が萬能の力を一哲學に盡さるゝとすれば國家は果して如何でありますや哲學のみで國家の安寧は保たれ升か實に危險のことではありはしますまいが世の中の凡ての事は分業を立て居ります又餘り理論に斗り傾いて實際に遠ざかるはイカンことである故に私は青年諸君に向て佛教を實際的に研究あらんことを望みます茲に一人の書生がありまして此書生は哲學も學び佛教の道理も可なりに出来るが然し其行状はと云ふと下宿屋へ借を拵へ置手紙で逃る始末であり升又た一方に書生ありて此書生は理屈は深く知らざるが能く學生たるの徳義を守り順々に學業を遂へて立派に歸國するに至つた

としますれば孰が賞讃すべきでありませう青年會の諸君は宜しく後者の如くならねばならぬと思ひます、それで私は此會に注文することは第一に佛教を實際的に研究して貫はなけねばならぬと云ふ譯であります、

佛教を研究するに付ては何れの宗旨より遣りてもよいが先づ其徳義の薄き點を矯めねばならぬ學生の徳義に薄きは天下の輿論であります又佛教の最大目的なる者は鬼面を被て人を威かすと云ふことではない修めたることをば順々に行ふて往くのが其目的である、されば青年諸君は此の最大目的を踏み外さん様に注意を請はねばならぬ

此徳義を修むること、安心立命と云ふことが佛教の本旨でありますが此に付て私は佛教を二大別しまして此れよりお話しすることに致します即ち聖道門淨土門の二ツです禪、天臺などは聖道門の方で淨土や此眞宗などが淨土門であります此聖道門、淨土門で其の仕方が異つて居ります煎じ詰めれば安心立命と云ふが佛教の第一の目的である先づ聖道門の仕方は智徳を磨き以て安心立命すと云ふことで淨土門の方は安心立命して而後に智徳を磨くと云ふ譯であります又聖道門は此土入聖此土得果と申して夫の所謂生死の岸頭に立て大自在を得るので智徳を磨きつ、安心立命します淨土門は他土得證で其の相手をする者は極勝の者か極愚の者であります智恵なき者は到底聖道門で安心立命は出来ません又智恵ある者逆も例へば政治家や教育家の如き専門の仕事を抑へて居る人にすれば其専門を捨て、聖道門で未來の事を研究する譯には行きません此等の人々は高尚なる未來研究をせず未來のことを佛即ち盡十方無碍光如來に任じ奉り以て安心立命すべきことである夫の大内青巒居士が前に云はる、が如く聖道門は向ふを拂ふて自分獨りとなり淨土門は己の智識を働せず佛に任すと申しますれば我々の信ずる處にては無碍光如來に任して園光大師の所謂愚癡に歸りて念佛を唱ふるがよいと思ひます斯くすれば我々は佛の光明中に生活すること、なります佛の光明中に生活する力で平生の行状も自ら改まり徳義も自ら修まること、なります淨土門の人々は安心立命したる報謝として社會の爲に智識を磨き社會の爲に致します、されば聖道門は淨土門と異なるものではないが、つまり智識と道德を磨くことに至つては全く一であります、

私は常に人に向つて云ふことですが青年諸君は其専門として學ぶ所の職分を有し實に忙しき身である到底未來研究の暇はない、縦し暇があると

しても夫れを遣れば一方が疎漏になる譯であります故に未來のことは佛に任し今世の生活に注意しなければならぬことである斯くして社會の上に智識を磨くは即ち是れ佛恩報謝となります何ぜなれば大慈大悲の佛より見れば日本が十より二十、二十より三十と積極に進む程御喜びあるに相違ない夫の存覺先徳が世々に受けたる父母の恩よりは今世に受けたる父母の恩が勝れ世々に受けたる國王の恩よりは今世に受けたる國王の恩が勝ると申されましたが實に此通りでありますそこで又私は之に世々に受たる社會の恩よりは今世に受けたる社會の恩が勝ると付け加へして青年諸君が社會の爲に働き立派なる社會を造るは是れ殊に勝れたる社會の恩を報ずる者であつて取りも直さず報恩謝徳となることであります、」(222-228 頁)

やはりこうした夏期講習会の講師の常連(売れっ子!)であつたらう加藤咄堂氏は、例えば加藤咄堂 [1913] 卷頭に以下の如き「例言」を記している。

「一 本書は「筆と舌」發行後、近く一年間に公にしたる書窓車窓の感想小品を蒐集したるものにして、惡文舊に依て舊の如しと雖も、婆心は年と共に更に一段を加へたるを覺ゆ。

一 近き一年間の予の生活は書窓車窓の生活なり、年の半は行雲流水の身となれる豫の餘れる時を書窓に費して或は讀み、或は書く、讀む所多からず、書く所深からず、唯だ收めて以て自修教他の資に供せむとしたるが爲めに、其の云ふ所は主として靜動二面の修養に關し、語る所は自己反省の料のみ、識者其の卑近を笑ふなかれ。

一 筆耕舌耕二十有餘年、齡不惑を過ぎて未だ安立の地を得ず、鬢髮、霜を加へて壯志なほ消えず。言の稚氣を脱せず、説の圓熟を缺くもの其れ之れに由るか。試に「筆と舌」を取り、更に本書を見る。其の間自ら何の進境なきを思ふ。慙づ我此の如くにして終るべけむや。上梓に際して感慨殊に深し。

大正二年秋 著者識」(1-2 頁)

そして本文中「書窓車窓」と題した章の「夏より秋へ」と謳う部分に「高山町」との見出しを持つ以下のような文が記されている。

「高山は四面繞らすに山を以てする盆地にして東に乗鞍嶽、鎗嶽あり尚ほ雪を戴きて天空一抹西に聳ゆる白山に對し、北隅模糊の間に越中の

立山あり南隅亦木曾の御嶽を望むべく殊に近年噴火し初めし硫黄嶽は黒煙を吐いて天を摩す、四山悉くこれ峻嶺此地も亦海拔一千九百尺、宮川は町の中央を貫流して翠柳、陰を爲し、水は清冽にして境も亦美、戸數三千餘、實に我が國中最高地にあるの都會、市區井然として頗る京都に類し、詩人の時に小京華の語を此地に冠するまた不當の辭にあらず、大谷派本願寺の別院たる照蓮寺には寓す、寺は後鳥羽天皇の皇子の親鸞上人に歸して殊に邊陲の地を度せんとして創立せられしものと傳へ、門徒國中に遍く、儼然として一國の教權を掌握す、午前は佛教講習、午後は教育講習、夜は公開演説にて五日間全く忙殺せらる、殊に夜の演説には聽衆連夜二千名を降らず流汗淋漓、到底海拔一千九百尺の地にある心地せず、僅に閑を偷みて國分寺に遊びて千年の靈佛に渴仰の情を寄せ東照宮に詣でて涼風に浴す、終るの前夜有志五六と金龜樓に晚餐會を開く、細鱗杯盤に躍り松影、酒觴に動く、一夕の清興。翌廿七日、山徑を辿りて大隆寺に至る、寺は老■古松の中にありて清風徐に座に入り、精進料理の饗應を受く。」(141-142 頁)

明治期の仏教を考える場合、いわゆる「廢仏毀釈」と呼ばれる事態が最初に位置していると認めることは重要なことであろう。詳しい事情は、手っ取り早く田村 [2005] などに就くのがいいと思われるが、例えば長井 [1939] の次のような一節を踏まえておくだけでも有効なのではないか。「佛教が信仰中心となつて一般民衆の間に普及されるやうになつてこそ釋尊の救世の本懐が實現されたのである。かやうに考へて來ると、釋尊の大理想は我日本に於てのみ實現されて、印度に於ても支那に於ても實現されなかつたのである。佛教的信念が一般民衆の魂に深く刻まれなければ永遠の力とはならないであらう。印度ではシャンカラアーチャルヤの哲學や回教徒の暴力で佛教は脆くも潰滅に歸して今はあの廣大なる印度本土に一人の佛教信者を見ない現状である。支那には古くは三武一宗の法難があり、近くは中華民國になつてからは佛教は頓に衰滅に傾いてゐるやうである。佛教は傳來されて以來實に一千四百年の間順調に發展して來たが、明治の初年に當つて歐米文明に心酔した政治家の排佛的暴舉に出遭つたが、民衆の魂に浸み込んだ信念は一時の政策などで滅却する譯には行かず、今後はどうなうとも佛教は今尚ほ大衆の中に生きて居るのである。」(165-166 頁)

また、明治期の仏教事情を伺うには、「第三章 明治以後の佛教」を持つ山邊 [1941] の記述は欠かせない。同章三「佛教の復興運動」には次のように言う。

「今少しく具體的に佛教の復興運動に一瞥を與へて見よう。廢佛毀釋が終つて、神佛分離となり今まで壓迫を受けて居つた佛教各宗は、そのしぼられた繩がとかれて、大體各宗の行政は、その管長一任と云ふ風になつた。爾來、各宗共に新しい時代に相應するやうな復興の仕事に忙しくなつて來た。先づ幕府時代に於て權力者の比護を最も多く受けて居なかつた東西本願寺は明治の初めから、雙方力を協せて起ち上つた。本願寺派では勤王の志深き光尊法主が逸早く連枝梅上澤融師に島地默雷・大洲鐵然の二師を添へて外遊せしめたが、一行は歸朝後その新進の知識をもつて猛烈に佛教の獨立運動を畫策して成功する處あり、大谷派にあつては、光瑩新法主が北海道の開拓に先鞭をつけ、又石川舜臺師を伴うて歐米を歴遊し、歸朝後は一方には兩堂再建の大事業を營むと共に、教學方面に力を盡し、帝國大學に井上圓了、清澤滿之、稻葉昌丸等の優秀の學生を派遣して、その後の佛教教學興隆の基を築いた。曹洞宗には原坦山、西有穆山、森田悟由等の諸師あつて、當時の廢佛毀釋の後を受けて、一方には宗内に於ける教學の基礎を固め、他方には又各地方を廻つて信徒の誘掖に努め、大いなる功績を擧げて居る。淨土宗には増上寺に稀に見る學徳兼備なる福田行誠上人が出て、その感化の下に後年多くの學僧が輩出して居る。又眞宗と共に日本に生え拔きの、家庭に力を持つて居る日蓮宗に於ては、日薩・日鑑・日修等の名僧輩出し、明治の初年以來内外多端の際に處して、よく内に向つては、宗務・學務・財務等の組織を改め、外に向つては布教師を巡國せしめて、布教の目的を達成した。他日、本宗に田中智學居士が出て、・・・又是が文藝方面に於て高山樗牛を出し、・・・即ち山岡鐵舟、島尾得庵、河合清丸等の諸氏は神、儒、佛三教の一致運動を起して、・・・又その後少しく後れて大内青巒居士はその門下を率ゐて平易な筆と口を以て全國を巡遊し大いなる感化を残した。併し斯様に佛教の立派な人達が一齊に立つて護教運動に従事したと云ふことは、佛教渡來以來千何百年間に於て初めて嘗めた苦杯が何者であるかを語ると同時に、又基督教がその教義はともあれ、あらゆる優秀な文化を持つた先進國を背景にして、巨大な傳道費を以て日本に臨んだ脅威を反證するものである。・・・」(山邊 [1941] 164-166 頁)

さらに同四「新教學と新信仰」には、次のように言う。

「又一方教學の方面を見れば、先づ新しく入つて來た西洋哲學であるが、これに對して第一に佛敎的消化を企てたのは、井上圓了博士であつた。……續いて村上專精博士は、その優秀なる門下の境野黃洋博士、鷲尾順敬博士等……井上哲次郎博士は逸早く佛敎の新しい見方に眼をつけて、『釋迦牟尼傳』を著し、その門下から姉崎正治博士等の優秀なる佛敎研究者を出したことは見逃すことが出來ない。更に本願寺派の島地默雷、大洲鐵然、赤松連城諸師……尙ほ明治三十二三年頃、大谷派に清澤滿之師出で、……その後信仰界に近松常角、多田鼎、曉鳥敏等の諸師を出して……更に、その後の教學の方面には、滑々谷快天、望月信享、椎尾辯匡の諸博士あり、各々の方面に巨大な足蹟を印し、續いて木村泰賢、宇井伯壽、矢吹慶輝の諸博士、竝に著者の親友赤沼智善教授は、恐らく佛敎研究上、今日まで見ることの出來ない程の力の籠つた研究の成果を收め、更に研究と體驗の一致の上に新しい開拓を試みた佐々木月樵、島地大等、曾我量深、金子大榮の諸師あり、良に文質彬々たる有様である、

又一般思想研究の方面には、前述の姉崎博士に次いで和辻哲郎博士の優秀な研究あり、大器晩成ともいふべき鈴木大拙博士は得意の英文を以つて禪の研究の大著述を試み、世界の思想界に偉大な影響を與へてゐる。そして最近物故せられた寺本婉雅教授が、逸早く河口慧海師と前後して入藏し、西藏原典研究の先驅をなした業績は逸し去ることは出來ない。尙ほ高島米峰、江部鴨村、梅原眞隆、馬口行啓、友松圓諦、高神覺昇、野依秀市の諸氏が現下教界の第一線に立つて活躍して居られるのは周知である。」(167-171頁)

山邊の同僚とも言うべき赤沼智善は赤沼[1928]の中で、次のように言う。「徳川三百年、鎖國の夢が破れて、我が日本が、世界の烈しい競争の荒海に乗り出してからは、日本の事々物々、變らないものがない程に變つて來たのであるが、我が佛敎研究も、徳川時代のそれとは、丸で違つた成績を見せて來たのである。廢佛毀釋の後を受けて、古いものは何でも葬むれ、新しいものは、何でもどしどし、受け入れよといったような時代に、この甚だ香ばしくなく教勢の中に、佛敎者は心を潛めて、後日を期して、徐に自らのものを研究してゐた譯であつて、その尊い努力に依つて、佛敎の學は異常の進歩を遂げ、今迄にない陸離たる光彩を發揮して來たのである。

その結果としては、一方、その輝き出して来た生命に、世の一般の人々の心を引くと共に、又一方、大正時代の非常に盛んな研究の黄金時代に對する準備となつたものであつて、佛教の研究といふことで見ると、明治時代はその研究の根幹の出來上つた時代、大正の御代はその研究の花が開いた時代、昭和の御代以後は、愈々その實を結ぶことになるであらうと思ふ。近頃佛教を聞かうとせらるゝ人々の中でも、先づ佛教の教理を系統的に聞いて、正しい理解を得ようとせらるゝ傾向の多いなどは、時代も時代であるが、又佛教の學の研究の一つの影響と見ることが出来るものである。」(34頁)

高島 [1948] は、「第三十七章 政治の中心と新佛教」で次のように言う。「・・・明治維新、王政復古ということが實現して、政治の中心が東京に移つたが、この時に當然新しい佛教が生れなければならないのに、なぜそれが生れなかつたかというに、それは維新前後の思想的混亂に乗じて、一部の思想家、漢學者、國學者達が、官憲と氣脈を通じて、廢佛毀釋という暴舉を行つたからである。・・・<中略>・・・政治の中心の移動する度毎に、新しい佛教が生れて居るといふ、歴史的事實に即して考えれば、明治時代には、當然明治時代の新しい佛教が、生れなければならなかつたのであるが、それが前述のような事情で、生れ損つてしまつたのである。しかし、不幸中の幸ともいふべきは、一時全く死にかゝつた佛教の母體も、辛うじて命だけは取り止めたことである。生命だけは取り止めたが、餘り打撃が強かつたゝめに、その傷痕の恢復に手間取り、思うように活動することが出来なかつた。その間隙に乗じて、キリスト教が教線を擴張する、教派神道が續々生れる、舶來の唯物思想が跋扈する、遂に反宗教運動までが起るといふので、誠に弱り目に祟り目というような状態であつた。」(207-208頁)

この点に関しても山内 [2009] は以下のように記述している。「なんと言つても快天の多感な一〇代から二〇代は、明治一〇年(一八七七)一明治二〇年に相当し、排仏毀釈が、文字どおり苛酷に行われた時代である。

快天の人生を語る時、この青年期に受けた排仏毀釈の体験は、彼の人生の基盤を形づくるものとして、もっとも重視する必要があるとわたしには

思われる。生涯それは消え去ることはなかったと云ってよい。快天は、その意味では日本仏教の、身近に云えば宗門の、滅亡の危機意識の中に生きた人と云ってよい。」（236頁）

金沢〔2013〕でも用いた山上〔1916〕の日置黙仙禅師の発言を再引しよう。それは忽滑谷快天と夏期講習会に関しても、きわめて興味深い情報をもたらしてくれるからだ。

老『實は忽滑谷さんをと思つたけれど、此の夏は最早各地方の講習會やら講演やらの日割まで出来て居るそうだ。で、忽滑谷さんが君を推舉されたのだ。』⁵

むすびにかえて

忽滑谷快天とも関わりのある「近代の仏教の夏期講習会」に言及・紹介する本攷は、実のところ、「忽滑谷快天ノート」の（1）として構想したものであった。したがって、現状の如く、順番を変えて、既に（1）（2）を發表してしまったこともあり、また突然公務が忙しなくなったこともあって、それを随分とほったらかしにしてあったのである。それを今回敢えて本誌に寄稿しようと思立ったのは、その後に遭遇した、二つの事件のせいである。ひょんなことで始めてしまったこのノートのゴールは、忽滑谷快天の著作を通じて忽滑谷快天の人とその思想について思いを致すことであったらうか。今回の「夏期講習会」は、忽滑谷快天の時代を考える上で、避けて通れぬものであったと思う。わたし自身が語るよりも、資料そのものを通じて夏期講習会の状況を明らかにしたい、その観点より、本攷には附録として旧資料を少なからず再録させていただいた。それらを是非ご覧頂きたいと考える。

忽滑谷快天その人に関しては、もうわたしに出来るような作業は、そうはないし、わたしのパッションをかき立てるような出来事もないかと思っていたのであるが、しばらく前に、『忽滑谷快天全集』問題に関わるような、仰天すべき書物入手したのであった。駒澤大学／曹洞宗の周辺で、過去に『忽滑谷快天全集』の計画が構想されたことがあったと仄聞している。

⁵ 金沢〔2013〕439頁、註13参照。

山内 [2009] にもかなりはっきりと触れられている⁶し、大学の宗学を専門とする同僚などからも耳にしたことがある。計画は起こったものの結局はお流れになったとか。忽滑谷快天の著作の中に、現在では社会的にしばしば問題になる特殊な用語が頻出するためなども聞いた。したがって、忽滑谷快天全集の実現は望めないだろうということである。それでも、その著作活動の全容だけでも早期のうちに明確にしておくべきだとの思いは門外漢のわたしなどのうちにも強くあった。したがって、わたしは忽滑谷快天の著作を古書店などで見かける度に一冊、また一冊といった具合に買い漁っていた。大学の図書館には「忽滑谷文庫」というものがある、おそらく忽滑谷快天旧蔵の蔵書をまとめたものであろうが、図書館の書庫の一角を占有していたのであったが、図書館の収蔵スペースの慢性的な不足が原因であろう、いつの間にか忽滑谷文庫の看板は下ろされ？ 蔵書の重複を避けるようにして？ 一般の図書の中に解消されてしまった。それでも忽滑谷快天の名前で刊行された単行本の全容は、がんばれば、なんとか知れるだろうと思われるが、果たして現在、忽滑谷快天の全著作を蒐集して所蔵している人がいるのだろうか。また様々な機会に書かれたらう文章についての情報を押さえている個人や団体はあるのだろうか。このまま埋もれさせておいていいのだろうか。日々そんな思いだけは一人で気まぐれに醸成していたのであるが、そんなわたしを一瞬奮い立たせるに充分な一冊の書物との出会いがあった。な、な、なんと、その書物の分厚い背表紙には『快天禅師全集⁷ 第一巻』とあったのである。『禅学批判論』(明治三十八年十一月)『批判解説 禅学新論』(明治四十年七月)『禅の妙味』



快天禅師全集第一巻書影

⁶ 山内 [2009] 18-19 頁、216-217 頁、253 頁参照。

⁷ 古びた豪華なこの書物を入手した話を、曹洞宗宗学を専門とする同僚に自慢げに話をしたところ、直ちに「快天禅師」という呼称を書名に持つ書物は「おかしい」「いかがわしい」と指摘された。禅宗の僧侶だから「禅師」とお気楽に考えていた無知な門外漢のわたしに対して、忽滑谷快天は「禅師」ではない、と教え諭してくれたのである。したがって、その書物の真正性は疑われるということであった。『坦山和尚全集』(光融館 1909) のことが想起された。この全集には「原坦山禅師」や「原坦山老禅師」との呼称を用いた追悼文も収録されていた。

(明治三十九年十一月)『禅学講話』(明治三十九年六月)の四著作が収録されているのである。背革マウント装の豪華な製本である。その素性は知れず、また續巻がどうなったのかは不明であるが、忽滑谷快天の全集を企図してまがりなりにも一冊の書物として具体化した人物がいたことの証にはなるのではないか。もしかしたら、わたしの手許にあるそれは、世界でただ一冊の『忽滑谷快天全集』かも知れない。その全集の作り手のことを考えるともうワクワクしてしまった。それが一つ。

もう一つの事件とは、中学校の同級生であつたらしい、忽滑谷快天と夏目漱石の再会のエピソードを入手したことである。狭い日本のこと、夏目漱石(1867～1916)と忽滑谷快天(1867～1934)という二人であるから、不思議でもなんでもないようだが、その二人が再会してどのような会話を交わしたかを想像してみると、やはりワクワクする。わたしの好奇心は俄然再燃したというわけである。後者に関わる仏文学者の辰野隆の「漱石の印象」と題された文章に関しては、機会があつて、すでに金沢[2018]⁸として公にした。残る前者、忽滑谷快天の著作と全集の問題は今後に残されたわたしの課題、老後の？楽しみの一つになるかも知れない。

【略号・参考文献(抄)】

赤沼智善

[1928]: 著『佛教生活の理想』法蔵館: 京都

秋山悟庵

[1904]: 編『圓了講話集』鴻盟社

井上哲次郎

[1941]: 著『修正人格と修養』廣文堂書店: 東京

衛藤即応

[1952]: 講述『信仰の帰趣』

大内青巒

[1915]: 著『心の修鍊』東亜堂書房: 東京

加藤咄堂

[1913]: 著『書窓車窓』丙午出版社

⁸ したがって、謳ってはいないが、この金沢[2018]が実質的に「忽滑谷快天ノート(3)」である。したがって本致が「忽滑谷快天ノート(4)」になる。

(16) 忽滑谷快天ノート (4) —夏期講習会と明治期の仏教事情— (金沢)

金沢篤

[2012]: 「忽滑谷快天ノート (1) —欧米巡錫の実情—」『駒澤大学禪研究所年報』第24号

[2013]: 「忽滑谷快天ノート (2) —仏骨奉迎の顛末—」『駒澤大学禪研究所年報』第25号

[2018]: 「漱石と快天」『禪叢』(駒澤大学禪友会誌) 第15号

菊村紀彦

[1975]: 著『人と思想 金子大栄』読売新聞社

来馬琢道

[1934]: 著『禪的体验 街頭の仏教』

近藤俊太郎

[2009]: 「藺田宗恵「大洲鉄然宛書簡」—明治期仏教青年会運動の一側面—」『本願寺史料研究所報』第38号

境野黄洋

[1933]: 「追憶雑談」『現代佛教』第105号

佐々木亨

[1891]: 編『佛教新演説』明昇堂: 大阪

島地大等

[1928]: 著『思想と信仰』明治書院: 東京

藺田香融

[1960]: 「初期の仏教青年会」『顕真学苑論集』第51号

大日本佛教青年會

[1904]: 発行『明治三十六年夏期講習會 佛教講話録』

大日本雄辨會

[1927]: 編『新井石禪師大講演集』大日本雄辨會

[1927]: 編『高島米峰氏大講演集』大日本雄辨會

[1927]: 編『加藤咄堂氏大講演集』大日本雄辨會

高楠順次郎

[1933a]: 「明治佛教の大勢」『現代仏教』十周年特輯号

[1933b]: 「明治佛教に影響を與へた西洋の佛教學者」『現代仏教』十周年特輯号

[1934]: 著『東方の光としての佛教』大雄閣

高島米峰

- [1917]: 著『熱罵冷評』 丙午出版社
[1939]: 著『隨筆 人—現代五十人物を語る』 大東出版社: 東京
[1948]: 著『佛教の全貌』 龍行社: 東京
龍溪章雄
[1987]: 「明治期の仏教青年会運動 (上) —大日本仏教青年会を中心として—」『眞宗學』 第 75・76 合併号
辰野隆
[1939/1950]: 著『忘れ得ぬ人々』 角川文庫
田村晃祐
[2005]: 著『近代日本の仏教者たち』 日本放送出版協会: 東京
常光浩然
[1964]: 編『日本佛教渡米史』 佛教タイムス社内佛教出版局
[1968]: 著『明治の仏教者 上』 春秋社
[1969]: 著『明治の仏教者 下』 春秋社
長井真琴
[1939]: 著『佛教生活法』 大東出版社
忽滑谷快天 (1867-1934)
[19040514]: 話「佛教聖典論」『佛教講話録』 大日本佛教青年会: 東京
121-163 頁
[19051113]: 著『禅学批判論』 鴻盟社: 東京
[19051124]: 著『怪傑マホメット』 井冽堂: 東京
[19060621]: 著『禅学講話』 井冽堂: 東京
[19061113]: 著『禅土妙味』 井冽堂: 東京
[19070708]: 著『批判解説 禅学新論』 井冽堂: 東京
[19090225]: 著『清新禅話』 井冽堂: 東京
[19100812]: 著『宇宙美観』 服部書店・文泉堂: 東京
[19110401]: 訳『心霊之謎』 (アディントン・ブルース著・共訳者: 門脇伯水)
森江本店: 東京
[19121005]: 著『楽天生活の妙味』 弘學館書店: 東京
[19130715]: 著『養気鍊心の実験』 東亜堂書房: 東京
[19151115]: 著『和漢名士参禅集・忽滑谷快天評釈』 丙午出版社: 東京
[19160615]: 著『縮刷』 批判解説 禅学新論』 東亜堂: 東京
[19220618]: 著『悟りの生活 達人達観』 星文館書店: 東京

(18) 忽滑谷快天ノート (4) —夏期講習会と明治期の仏教事情— (金沢)

- [19230701] : 著『禅学思想史 上巻』玄黄社 : 東京
[19240601] : 著『禅学思想史 下巻』玄黄社 : 東京
[19250601] : 著『禅の妙味』忠誠堂 : 東京
[19251115] : 著『鍊心術』忠誠堂 : 東京
[19330701] : 『佛骨奉迎回顧録』『現代佛教』明治佛教の研究・回顧 : 十周年記念特輯号
日置黙仙
[1915] : 著『鍊膽術』実業之日本社
[1916a] : 述『活禅活話』一喝社
[1916b] : 著『悟つてから』光融館
松本文三郎
[1911] : 著『宗教と學術』隆文館
村上專精
[1943] : 著『佛教唯心論』創元社
山上曹源
[1916] : 編『日置黙仙 破草履』光融館 : 東京
山邊習學
[1941] : 著『佛教の新體制』第一書房
山内舜雄
[2001] : 著『道元禅の近代化過程』大蔵出版
[2009] : 著『統道元禅の近代化過程—忽滑谷快天の禅学とその思想〈駒澤大学建学史〉』慶友社
山本伸裕・碧海寿広
[2016] : 編『清沢満之と近代日本』法蔵館
吉村貫練
[1940] : 著『佛教界の人物』(東京帝大佛教青年會編) 三省堂

【旧資料再録 1】

「夏期講習會論」松本 [1911] 所収 (357-370 頁)

「二一 夏期講習會論」⁹

⁹ 但し松本 [1911] の目次 (2) 頁には「二一 夏期講習會に就て・・・三五七」とあり、該当の奇数頁の柱には「夏期講習會論」と印刷されている。本資料の初出雑誌？

年將さに夏期に入らんとし、此七八月兩月の中に於ては各地方講習會の開催せらるゝこと實に驚くべきばかりであつて、此傾向は概して之を見れば、年一年と盛大となるやうに思はれる。東西兩京を始め、高等教育機關の設立せられて居る所は固より論を俟たず、縣は縣と競ひ、郡は郡と争ひ各團體各學校亦皆尠からざる費用を投じ、先を争ふて講習會を開かんとし、而して講師の中には當代の大家、知名の士を多く羅列するを以て誇となし、聽講者の群衆堂に滿つるを以て得意として居る。表面からして之を見れば、如何にも我が國民は學藝修養に熱心であつて、此炎暑燃くが如きの候にあつても寸時を空しうせず、進取の氣に充ち滿ちて居るやうに感ぜられる。特に近年日露戈を交へてからは、既に武を以て其の威を世界に煥發したのであるから、平和克復の後に於ける本年の如きは、愈其才藝を學習し、其精神を修養し、我邦國の文藝亦武術に劣らざるを期せんとする國民精神の發露するものとも感ぜられ、講習會の盛大なるは一般邦人の衷心より慶喜しなければならぬことのやうに觀察せられぬでもない。が、物盛なれば他面に弊害の之に伴ひ來るは勢の必らず免れざる所である。多少の弊害があるからといつて、直ちに之を打破するは決して策の得たるものでないことは明かであるが、併しながら弊害の次第に増長するに及んでは、假令ひ最初の目的は如何に善良であつたとしても、利害の相償ふに至らないのも世間には例の少いことではない、のみならず利の極めて少くして害の極めて多いことも絶無とはいへぬ。現時の講習會なるものは果して何れの部分に屬すべきものであらうかは、當事者の大に研究を要する問題でなからうかと思ふ。此の如くにいつたならば、當事者は大に怒るかも知れぬ、然ながら當事者の精神目的が如何に有利有益の事業にあるにしても、其實績の之に副はぬのみならず、反つて不利有害の結果を來すことがありとしたならば、單に罪を聽講者の不熱心にのみ歸する譯には行くまい、當事者も亦明かに不明の責を負はなければならぬのである。勿論講習會といつても、是れには色々様々のものであるのであつて、逆も少からぬであらうけれども、此には唯今時各地方に於て頻々として顯はれ來る講習會一般に就いて論ずるに過ぎぬ。

餘輩の祕かに見聞する所によれば、近時講習會の盛なのは一の流行、一の競争心から起つて居るのであつて、極少數の場合を除くの外は、眞實好學

などは不明。

修養の念から生じたのでないやうに思はれるのは、如何にも遺憾に堪へない所である。縣のものはいふ、隣の縣に於ては毎年夏期に於て講習會を開いて居るに、我が縣に此催のないのは誠に教育に不熱心なやうに考へられると。郡のものはいふ、隣の郡では昨年は何某といふ人を講師として講習會を開いたから我が郡にも今年は是非我が郡にも今年是非開かなければならぬと。愈二三の主唱者があつて之を當局者に語れば、當局者も勿論之を排斥すべき理由を有せぬのであるから、先づ賛成を表する、此の如くにして講習會は容易に成立する、某講師を聘するに於ても、某の處では昨年は東京から特に大家を依頼し來つたから、今年是我地方に於ても之と匹敵すべき人を聘さなければならぬといふやうな譯で、一種の見えの競争で出來て來るやうに思はれる。で其地方に於ては如何なる學科の教育が最も必要であるか、如何なる方面に於て最も多く指導を受くべき必要があるか等の問題は、殆ど當事者の眼中にはない。唯誰れか大家知名の士が來て、一定の時日の間、講義をしてさへ呉れ、ばそれで事足りといふ有様である。従て聽講者の上に如何程の裨益を與へるであらうか抔といふことは、始めから考へ及ばないのが多いやうである。尚ほ極端に之をいへば、現時知名の士が來つて講演を開き、聽講者が數百千人にもなり、堂に溢る、ばかりにもなれば、今回の講習會は誠に豫想外の好成绩であつたといつて喜び、其實聽講者には講師のいふ所の更らに何たるを辨せず、假令又之を辨ずるも何等の深い印象を受けたといふことがなくても、彼等は此等の點に就いては恬として顧みないの多いのではなからうか。若し此の如くであるとすれば、講習會の名は美なりとするも、畢竟何等の價值はないのである、啻に價值が無いのみならず、甚だしく有害なものといはなければならぬ。此の如き講習會が盛なれば盛なる程愈無益の財を費し、害毒を聽講者に流布することになるのである。

假令ひ此の如き極端にまでは至らぬにしても、免に角近年の講習會が次第に多く此傾向を有し來つたことは疑ふべからざる事實であらう。で本年は將さに夏期に入らんとするに先ち、文部の當局者は既に此弊を豫防せんが爲め、特に各地長官に向つて講習會に冠する一の通牒を爲したのである。・・・」(357-361 頁)

「其中に左の如き箇條がある。

講習の學科は可成小學校の教科目と直接の關係あるものを選び、尚ほ自習に不便なるものを選ぶを可とす。

講習會の講師は成るべく中等學校の有資格の教員にて小學教育に通曉せるものを最も適任とす。

此二箇條は明かに前述の弊害を看破したるものといはなければならぬ。が講習員自身の講習會に對する感想は、尙ほ一層興味あることであつて、又當事者の深く留意しなければならぬこと、思ふ。此點に就いては先年發行に係る雑誌「教育界」の第五卷第九號に掲載せる各地に於ける講習員の感想は、大なる參考の資料を給するものといはなければならぬ。勿論彼雑誌に掲載する所は、其數僅かに二十に止まる、(尙ほ外に十數氏の投書もあつたが意見の同じきものは之を畧したといふことである、) 之のみからしては尙ほ何等の斷然たる結論をも引き出すことは困難であるが、併し少くとも一部の講習員の間には、講習會なるものが如何なる印象を與へたかといふことも知り得るのである。得に少數ながらも、其感ずる所に於ては、互ひに相一致する點が甚だ多いのであるから、亦以て其一班の狀況を推知し得ないでもない。

《大日本佛教青年會》資料

【旧資料再録2】

『佛教新演説』(子爵 烏尾彌太題字・紀陽 佐々木亨編纂) 明昇堂：大阪
明治24年(1891年)

「佛教新演説序」

「人出レバ婦ルヲ知ラザル莫ク、住ヘバ居ヲ懷ハザルハ莫シ、然レドモ是
レー時ノ他出、一時ノ住居ニシテ、即チ常時ノ他出、常時ノ住居ニ非ズ、
夫レ肉体ハ一時ナリ、靈魂ハ常時ナリ、肉体極メテ衛生ヲ務ムト雖モ、人々
三百歳ヲ期スベカラズ、偶マ百六歳ノ三浦氏アリ、米齡ノ翁、古ノ稀嫗ア
ルベシト雖モ、還曆猶ホ稀有トシテ賀シ、常名五十歳ニ至ル者亦多シト謂
フベカラズ、初老猶ホ賀シ、以下ハ 少壯夭折ノ者多々アリ、人生寔ニ頼
ミ少々不定ニシテ又不定ナラズヤ、縦ヒ千歳ノ壽ヲ保ツト雖モ、転々輪廻
ノ無量壽ニ比スレバ、實ニ尺中ノ分厘ノミ、佛ハ其時三世ニ亘リ、其戒廣
ク三千世界ニ跨リ、其壽千世界世ニ亘リ、其壽無量ニシテ、若シ善ク其ノ
果ヲ得ルコトハ不可思議ノ快樂アリ、人能ク業因満盈シテ、往テ無為ノ都
ニ歸リ、真如ノ月ヲ望ムニ至ルハ、真ニ住スル者ト謂フベシ、此書高僧碩
学等諸氏ノ卓論高説ヲ輯メ、目ノ邊リ之ニ接シテ親シク其ノ言ヲ聞クガ如
クス、即チ牛ニ牽カレズ坐ラニシテ善光寺ニ詣ヅルヲ得ルハ、則チ此書ヲ

見ルニ在ル乎、世ノ無為ノ都ノ安宅ニ帰り、此ニ住シテ真如ノ月ヲ觀ント
欲スル者、先ヅスル書ニ由リ路蹠初メバ、庶幾クバ其目的ヲ達スルヲ得ム、
昔明治二十四年孟蘭盆会之前三月
夢幻居士謹撰」

【旧資料再録 3】

『明治三十六年夏期講習會 佛教講話録』大日本佛教青年會 明治 37 年
(1904 年)

[p.1]

「佛教講話録附録 佛教夏期講習會略歴」

回顧すれば明治二十四年十一月二十七日、寺田福壽師、帝國大學第一高等
中學校學生間に組織せらるゝ徳風會々員に牒して曰く、今夕は實に是れ
七百年前我宗祖親鸞聖人往生の前日に當る、古來眞宗の法流を汲む者年々
今宵を徹し、彌陀大悲の妙法を聴き、安心立命の要義を談じ、以て宗祖に
對する報恩の一助となすを常とす、拙僧亦此遺風に遵ひ近隣の信男信女を
集めて年々此事をなす、諸君若し餘暇の存するあらば、乞ふ來り會せよと、
會員十數名招きに應じて同寺に參す、諸僧の説法、各々佛心の大悲を説き
得て妙、參拜者をして轉た歡喜の念を催ふし坐ろに渴仰の頭を垂れしむ、
夜色沈々漸く移る、即ち寺田師、徳に徳風會員を別室に導き茶菓を供せら
る會員等無上の佛縁に接し、身心殊に爽快、熱心共に爲法の方策を議す、
終に夏期學校を起すべき事及び之に先んじて東都各學校在學の佛教青年を
連合す [p.2] べしとの議一決し、明年の春陽と共に東都佛教青年の大會
を開かむことを期し、委員を選定して退散せり

二十五年一月六日昨冬の徳風會々員の決議により本郷駒込眞淨寺に東都佛
教青年大會を開く、會する者數十名、皆是れ帝國大學、第一高等學校、專
門學校、慶應義塾、哲學館、法學院及び其他官私學校に在學せる、護法愛
國の赤誠肺肝に溢れたる佛教青年たり、席定まるや、談忽ち法運の通塞に
及ぶ、何れも皆其衰頽を慨歎せざるはなし終に相誓て曰く。嚴護法城の任
や、是れ専ら先輩諸氏にのみ依託すべきに非ず、學生間の布教は、實に我
輩の同心戮力に依らざる可からずと是に於てか、年々夏期講習會并に釋尊
降誕會を催ふす事を議決す是を之れ、我大日本佛教青年會の濫觴とす而し
て其之を行ふや、巨多の資力及び經驗を要す是を以て各校其委員を定め、
徳風會員をして専ら講習會の事に當らしめたり、爾來同會員は熱誠事に從

ひ之を西都なる第三高等學校、大派大學寮、本派大學林、同文學、寮、及京都尋常中學校内の佛教有志諸士に諮りしに、皆大に之を賛し。誓ふに講師招聘、會員募集の勞を執らんことを以てす、東都の有志欣喜踊躍亦専ら會員募集の事に當れり、終に同年七月二十日、第 [p.3] 一回夏期講習會を攝洲須磨の源光寺に開く、東西會する者八十餘名是を我國東西の學生が連合的事業をなせし濫觴なりとす

第二回夏期講習會は、地理の便宜により會場を東西二ヶ所に選ぶ、東は明治二十六年七月十三日を以て鎌倉圓覺寺に、西は同月十五日を以て伊勢二見正覺寺に兩部相應して開會せり共に是れ東西名勝の地、松籟濤聲却て獅子吼の妙音に和して勇ましく樹陰の?聲、宛然天女の奏樂の如く、此間二七の交遊如何に學生の間に温容なる感情を買得しぞ東部會員百二十七名、西部會員百十九名而して土地及諸般の事情により、右二ヶ所に參會し得ざる者、一は東京に一は九州熊本に、別に又夏期講習會を開けり、長足の進歩驚くに堪えたり

第三回夏期講習會は三州有志者の懇篤なる誘掖により東西の學生再び一處に會することゝなりぬ、二十七年七月十六日を以て蒲郡町に開會す、此地三河灣に濱し赭山蜿蜒之を掩ひ、稻田斷續左右に連なり、小島點々波間に聳ゆ、此一幅の畫中、涼風清かなる沙邊、爲に新に一會堂を建す、地方有志の歡待至らざるはなし、遙に東西より來えい會する者二百三十餘名殆んど招聘を受けたるものゝ如し。一堂の [p.4] 下妙法を味ひ情誼を温むる二週日沈滞せる法運頓に面目を一新せり、

第四回夏期講習會は西部故あり氣焰稍々挫けたるも、東部の氣焰毫も減退せず益昂騰せり、乃二十八年七月八日、煙波漂渺たる太平洋に面せる湘南三崎町に開く會する者百十一名皆是れ護法愛理の念に富める者されば人數は昨年に比して小なりと雖も、而も來會者の腦裏に大法護持の熱誠を増せしや甚だ多かりき、夏期講習會が實踐道德の根底を固めたるは、蓋し此時に在りとす

第五回夏期講習會は、東西に偏せざるの目的を以て、會場を遠洲新居町に卜す、地方の有志復た大に歡迎せり、二十九年七月十三日、同町龍石寺に開會の式を擧ぐ、爾來二週日、東西の碩徳各懸河の辯によりて以て、大乘微妙の法を演ぜらる去れば參會者の數前年に比し甚だ減少せりと雖も、皆常に渴仰の頭を垂れ坐ろに護法愛理の念を催はせるの度、遙に前年に優れりとす、若し夫れ其地景の感化をいはむか、湛々たる濱名湖上、時に扁舟

に棹さし放吟高歌せば、身は是れ仙境に在るが如く、螢雪一年の苦忽然として滅す爲に來會者相互の交情最も温まり、精神的修養其度宜敷を得たり [p.5]

第六回夏期講習會は實に是れ本會々熱再興の時機に逢へるもの乎、京都學生の元氣は再び勃興し、東都の學生亦一段の發奮をなせり、干茲東都は松洲八百八の勝景を聞法の靈場とし、西部は中國の勝區明石の浦を法筵の會場とす共に是れ地方の有志の熱心なる誘掖による乃東都は三十年七月六日を以て松洲瑞巖寺に開會式を舉ぐ、會する者百九十四名何れも皆な東都官私の諸校及び仙臺高等學校等に在學せる爲法の熱誠肺肝に溢れたる者なれば、二七の聞法爲に氣焰を高むる事萬丈高德の四辯を以て演ぜらるゝ妙法、其聲松籟に和し、清波靜によする所一堂の下會員能く情を温む、嗚呼復た盛なる哉、斯くも能く法縁の熟せる未だ曾てあらざりき、宜なるかな、其仙臺地方の佛教に一大彩を放てるや是れ地方有志の歡迎其力起りて多々なりと言ふ可し、西部は、全月十一日明石の光明寺に開會す、會する者百二十二人、是亦頗る盛にして、會員の熱誠妙法の説示能く其根機に叶へる、其他地方人士の待遇の丁重なる等、毫も東都に劣らず、大に氣焰を昂騰せり

第七回夏期講習會は東都附近の勝區に開くべかりしが、中途にして事故起り頓に止みぬ、去れど吾徒の熱誠能く佛陀の大悲に感應せしものか、當年春陽、偶 [p.6] 々佛教國たる尾州地方有志の熱誠なる誘導を受く、之を以て東都有志の徒大に喜び直に此旨を關西佛教青年會に通じ、前例により以て一處に會せんことを諮る、西部の諸士大に之を賛す、是に於て卅一年七月十日を以て熱海の濱清波靜に寄する知多郡常滑町正住院に開會の式を舉ぐ、院は是れ淨土宗に屬す會する者百三十人

第八回夏期講習會は若越裕志諸氏の熱心なる贊助により七月十二日より二十五日に至る迄敦賀萬象閣に開く、各地より集るもの雲の如く特に諸般の準備地方有志諸氏の盡力によりて秩序整々會者孰れも感謝の意を表せざるものなし各地出張の演説は特に頻繁を加へ、地方教務の擴張に益する所少なからず、二週日の講演は北陸の天地を撼かし本會の事業更に一段の進歩を見る會する者二百有餘名

第九回夏期講習會は駿州沼津町駿東郡會堂に於て七月十一日より二十四日に至る迄開會す、西部は廣島市に開くの豫定なりしも偶北清事變あり、寺院宿舍等凡て軍隊の宿泊する所となり遂に中止するの止むを得ざるに至

り、獨り東部に聞く [開く] こと、なれり、會する者百有餘名朝に富嶽を望み、夕に千本濱に遊び、西、白隱の舊跡を [p.7] 訪ひ、東靜浦に船を泛べ、昔を談し今を語り、手を取り、膝を交へて且暮精神修養の事に及ぶ、坂上宗詮師の提唱飯田權隱氏の熱誠殊に衆人を感化し、駿東の教界爲に活氣を生ずるに至れり

第十回夏期講習會は佛教徒信濃國民同盟會の歡迎を受け、信州十有餘の諸團體及各地の有志者之が贊助の勞を取り、七月十六日より二十九日に至る迄、長野縣々會議事堂及城山館に開會せり、午後の教育講習會は本年度に於て殊に注意するところあり、來聽者常に三百名より五百名に達し、非常の盛會を極めたり關西佛教青年會は七月十五日より二週間又伊勢四日市に開き白砂青松の間臨時講堂を新築し以て來聽者の便を圖り、西部の氣焰又頗る盛なり

第十一回夏期講習會は岐阜縣下佛教有志諸君の熱心なる歡迎を受け七月十三日より二十六日に至る迄幽邃なる養老公園に開會し、午後また例年に倣ひ教育講習會を開けり、地既に清く、常に溢るゝの聽衆又道を求むるの士、法音豈心耳に澄徹せざるの理あらんや、名にし負ふ佛教國の事とて善男善女の參聽殊に多かりしは、從來の講習會以外に、更に一異彩を放てり、關西佛教青年會は七月二十 [p.8] 日より二週間紀州和歌山市に開き聽講者比較的少數なりしも、眞摯なる態度によりて信念の修養を計り、浮華の流弊を一洗するに力めたるは頗る快心の事なり

本年度に於て殊に注意すべきは地方巡回講演を開ける事にあり、其目的たる一は之によつて以て夏期講習會の精力の一地方のみに限れる缺を補ふに資し傍全國佛教青年會の大同盟を形成するの階梯となし一は之によつて中央集權の結果として地方と中央との間に於ける智的懸隔の甚しきを調和せんとするにあり、當初の計畫たるまづ全國を九州、北越、東北三地方に區劃し、以て第一回の講演を開始せんとの規定なりしも、東北は講師偶病あり、九州は虎疫流行集會を禁せられし爲、共に果さず、之を實行するを得たるは僅に北越のみなりしは本會の深く遺憾とする所なり、然れども大内、北村、保倉三氏一行の二週日、十數箇所巨れる北越講演が、大に地方の歡迎を得て、至る所に盛況を呈せるは以て本會の計畫空しからず、大に其効果を擧げたるを知るべし、本會は各地に散在する會員諸氏及び有志諸彦の贊助を得て今後益々此講演の擴張を圖り以て當初の目的を貫徹せずんば止まざるを [p.9] 期す

第十二回夏期講習會は新潟縣下、上越佛教各宗寺院諸氏の熱心なる歓迎を受け、上越各地の有志者之が贊助の勞を取り、七月十三日より二十六日に至る二週日新潟縣五智國分寺に開會せり、午後また例年に倣ひ教育講習會を開けり、地少しく偏せしを以て、他地方より來會するの士尠かりしも、佛教國の事とて其の地の士女の參聽する者多く、日々堂に溢るゝばかりなり。出張演説亦頻繁にして北越の佛教に一大光彩を放てるや必せり關西佛教青年會は七月十六日より二十九日まで能洲和倉に開き、比較的來會者多く道德宗教界に偉大の貢獻をなせり

一昨年以降本年度に於ても全國各地到るところ夏期講習會を開かざるなく而して大日本佛教青年會は茲に第十二回の講習會を無事圓滿に結了し、心念修養の、爲に貢獻し青年佛教徒の中樞として漸次其の歩を進むることを得たるは本會の大に面目とする處なり

終りに臨みて本會は茲に地方有志諸氏の懇篤なる待遇と熱心なる助力とを感謝し、永く肺肝に銘じ相共に提携誘導以て教界の爲に力を盡さんことを希ふ

[p.10]

第拾貳回夏期講習會記事

明治三十六年七月第十二回夏期講習會を越後國中頸城郡五智に開く、夫れ五智の地たる左に郷津灣を控え右は直江津の海に接し、遙に翠滴る春日山を負ひて直に煙波渺々たる日本海に面す、白沙連り青松茂り地閑にして境幽風光の明媚北越第一と稱す、加之五佛の如來は顔容端嚴悲智の相を現じ國分寺の遺跡は千年以前佛教弘通の昔しを想はしむ、中古親鸞上人此に配所の月を眺めて其眞影を留め近くは佐田介石和尚北越に獅子吼して此に骨を埋めたり、佛教に因縁深き罕に見る所なり、且僅に半里を歩めば戰國の英雄上杉謙信公の居城を構へて遠く甲信の野を睥睨せし春日山に達するを得、登臨眺を檀にすれば上越一帶の原野一眸の下に集り、遠く海を隔てたる佐渡島は髣髴として雲か山かと疑はる、更に半日にして妙高山麓にありて眺望海内に比なき赤倉温泉に到るを得天下の奇觀たる石油の採掘竝に精煉の實況を目睹することを得、此の靈勝無比の地に會し今代の龍象を聘して幽玄微妙の法音を聞くことを得しは吾人の欣喜措く能はざる處なり

[p.11]

七月十一日 虎石惠實幹事新保徳壽及祥雲晚成の諸氏終列車にて來着本部事務所を清風亭に定む

七月十二日 地方委員諸氏と會し宿舍及會場を定む

開會式及閉會式々場	國分寺
前半期 會場	光源寺
後半期 會場	小丸山別院
講師旅舎として	鷄疑館、國分寺本坊、及び小丸山別院を當て講師生寄宿舍を小丸山別院とす

此日講師和田鼎事務員水谷猶象祥雲確悟、曾我量深小野藤太の諸氏來着明日の開會式準備に忙し

七月十三日 晴天午前八時半、島地默雷師來着す

豫定の通り午後一時より五智天臺宗寺院國分寺に於て開會式を執行す、其順序左の如し

一、 會員、委員、來賓、講師、一同着席

[p.12]

二、 君が代の奏樂

三、 事務長開設の辭

四、 本部幹事開會の辭

五、 來賓總代として中頸城郡長の演説及國分寺住職の祝詞

六、 祝電の披露

七、 會員總代祥雲文學士の答辭

八、 島地師の禮贊文誦讀

九、 前田師の人法不二と題する講筵

一〇、 島地師の講題孝論に關する演説

一一、 萬歳三唱

一二、 奏樂

本日來會者は講師、本部委員、地方事務委員、來賓、新聞記者、會員傍聽者無慮四百餘名、滿堂立錐の地なく、傍聽者の如きは全く堂外に停立するの止むを得ざる有様なりし、午後五時全く式を終り、夫より長岡新聞社の需に應して一同撮影せり

[p.13]

七月十四日 晴曇不定午前八時半、大内青巒師來着す、本日より會場を同地眞宗寺院光源寺に變更し、前田師の前日の續講、島地師の孝論大内師の宏智頌古の講演あり、講習生其他會員三百餘名島地師の滑脱なる快談大内師の流暢なる明辯、前田師の摯實なる論議、共に十二分の満足を聽

衆に與へたり

七月十五日 雨天午後晴る前田、島地、大内の三師前日に續いて講演あり、聽講者前日に同じく、殊に貴婦人數名の列席して熱心に聽聞するものありたり

午後一時より大内師及祥雲文學士は板倉村大字針、淨覺寺に於ける出張演説に赴き、大内師の「己を持す」祥雲氏の「人類の進化」と題する有趣味の演説あり、聽衆は場外に溢れ、同地未曾有の盛會なりき

又午後六時より直江津町林正寺に於て出張演説を開き、和田學士の「青年の覺悟」前田師の「其意を淨めよ」島地師の「盛衰」と題する演説あり、聽衆四百餘名是亦非常の盛會なりき

又午後八時よりは國分村國分小學校に於て同村耕心會の催に關る演説會に於て保倉師の「精神の修養」小野氏の「教界の現勢」、虎石學士の「四種の英雄」と題 [p.14] する講演あり、聽衆は多く青年にて頗る有益好望の會合なりし此日終列車にて加藤文學士東京より來着せり

七月十六日 晴雨不定、島地師は早朝汽船にて能登和倉に於て開設すべき西部講習會に向ふて出發し、前田師は前日に續ひて講演あり又曾我量深師の罪惡觀と題する熱誠なる講演あり、正午前田師は出發歸京の途に上る、午後六時黒田眞洞師來着せり、又忽滑谷快天師は正午直江津まで來着せり

本日午後二時より教育講習を開始し、加藤學士の「心身の關係」和田學士の「史的研究とは何ぞや」と題する講演あり、會員二百餘名孰れも熱心に聽講せり

此夜本部事務所に於て、本部委員及寄宿生一同の信仰茶話會を開き、各自の生國學歷及信仰上の談話討議をなし時の過ぐるを忘る

七月十七日 雨天午後晴る、忽滑谷快天師の「佛教聖典論」黒田眞洞師の「佛身論」と題する講演あり、忽滑谷師の明晰なる論辯、黒田師の熱誠なる説示俱に聽衆に多大の感を與へたと同時に又兩師の講演は自と同一問題に接觸し、大乘佛説非佛説上の議論に於て各々見解を異にするかの觀を呈し、聽衆に異様の感を起さし [p.15] めしかば、祥雲學士は兩師が觀察の位置の異なるより生ずる自然の結果として一見衝突するが如き觀あるも深く其趣旨を翫味すれば決して矛盾するものにあらざる所以を評説して以て一場の感興を添へ、會員は孰れも満足の裡に漸次散會せり
午後教育講習は加藤、和田兩學士前日の續きにて益佳境に入り兩氏の快

辯と其の明晰なる論議は深く講習者を感動せしむ

午後六時より小丸山別院に於て茶話會を催す、來會者無慮二百餘名、黒田和田、虎石、金子、高島¹⁰、諸師の懇切なる談話あり、孰れも胸襟を開いて懇談し、又洒落滑稽なる餘興ありて、連日練り固めたる會員の頭腦を洗慰せしめ、觀覽の微笑の裡九時に至つて各自隨意退散せり

七月十八日 雨天、忽滑谷、黒田兩師前日の續講あり

午後は加藤和田兩學士前日の續講

午後七時より五智青年會の催せる茶話會に忽滑谷、加藤、曾我三師出席し、忽滑谷師の「平等觀」加藤加〔學〕士の教育上の談話ありて來客者一同に大に感動を與へ〔p.16〕夫より各自歡談し十時散會せり

本日午後に新井石禪師は新潟より、松本博士は東京より一番列車にて孰れも來着せり

七月十九日 暴風雨、本日は日曜にて且つ遠足運動の豫定日なるを以て午前午後共に休講す

午前六時講習生一同岩の原葡萄園へ向け遠足運動の爲め出發し、高田に至りしに夜來の風雨益激甚なるを以て葡萄園行を中止し、高田町に在る諸學校を參觀し、午後三時歸宿せり此日園主より本會へ葡萄酒を寄贈せらる

午前五時味爽忽滑谷快天師虎石文學士は西頸城郡能生及槇村に於ける出張演説に赴く、洪雨盆を覆すが如く、暴風之に加はり行路の困難殆ど名状すべからず、險道約九里、人力車僅に通ずるのみ、午前十一時漸く槇村に達し、午後二時より同所耕田寺に於て演説會を開き、忽滑谷師の「佛陀の良心」、虎石學士の「佛教と國家の關係」と〔p.17〕題する講演あり、兩所共孰れも該地未曾有の盛會にて大雨泥途を厭はず、滿場の聽衆來會せしは流石佛教國の名に背かざるなり

又中川村中條に於ける演説會には正午より新井加藤二氏出張し、大水道路に泥濘する中を徒歩し、或は人夫に背負はれて河を渡る等困難を重ね、午後二時同地回速寺に於て、新井師の「佛教の厭世思想」加藤學士の「比較宗教學上佛教の一大特色」と題する演説あり、是れ亦能生槇村に劣ら

¹⁰「金子、高島」とある兩名は、「開設事務所地方係員姓名」の「交涉及評議員」に名前のある金子勇榮と高島辣健と思われる。前者は言うまでもなく後に名を馳せる金子大榮の父君である。

(30) 忽滑谷快天ノート (4) —夏期講習会と明治期の仏教事情— (金沢)

ぬ非常の盛會なりき

又同日午後一時より講習會場光源寺に於て特別演說會を開き、小野氏の「迷信論」和田學士の「信仰」黒田師の「業感論」と題する演說あり聽衆二百餘名聽者の熱心と辯士の摯實と互に相照應して痛く感動を與へたり

村上文學士は東京より終列車にて來着せり

七月二十日 晴雨不定、水谷文學士は一番列車にて歸京し吉田文學士は高田より第二列車にて來着せり

本日より講習會場を小丸山別院に移す、午前は黒田師の前講の續、松本博士の「釋迦小傳」、新井師の「碧巖録」、開講あり、又近角文學士は長岡より第三列車にて [p.18] 來着直ちに「實驗的修養」と題する講演あり、本日佛教講師四人にて黒田師の他松本博士の敬虔なる態度に由り誠實なる講說新井師の流麗明快なる辯議、近角學士の懇篤なる教訓孰れも深く聽講者の注意を惹きたり

午後教育講習は加藤學士の前日の續講、及吉田學士の倫理學開講あり、其深遠なる學理を明晰誠實なる辯舌にて巧に説き去り説き來るの所殆ど聽衆を酔はしむるの感ありたり

午後七時より小丸山別院に於て有志の信仰談話會を開き近角、曾我兩師が例の熱誠懇篤の談話ありたり

黒田師は此夜乗船能登和倉にて開會中の西部講習會に赴けり

七月二十一日 晴雲不定、午前八時齋藤唯信氏來着

午前は松本、新井、近角三師前日の續講あり

午後教育講習は吉田學士前日の續講、及村上學士の「支那哲學一斑」と題して誠實なる開講ありたり

又午後十一時より近角齋藤兩師は本郷に於ける出張演說會に臨み、同所西勝寺 [p.19] に於て、近角師の「感應道交」齋藤師の「信仰の動機」と題する演說あり、聽衆場外に溢れ非常の盛會なりき

午後加藤學士は出發長野に向ひ、近角學士は本郷の演說終了後終列車にて長野に向へり

七月二十二日 曇晴不定、和田學士一番列車にて出發歸京す

松本新井二師は前日の續講あり又齋藤師は「佛教の人生觀」と題する開講あり

午後教育講習は吉田、村上兩學士前日の續講あり

午後七時より齋藤、曾我兩師は百間町に於ける演説會に出張し同地榮恩寺にて開演し、齋藤師の「求法の要素」曾我師の「生死」と題する講演あり、新保幹事亦同行せり

七月二十三日 晴雨不定午後は松本新井齋藤三師の前日の續講あり、午後は村上吉田二學士前日の續講ありたり

午後六時より光源寺に於て茶話會を開く、來會者百餘名、滯留中の各講師各委 [p.20] 員皆臨席し、吉田學士の「團結の必要」と題する講話あり、例の明快莊重なる辯を振ふて來會者に多大の感動を與へ、夫より二三の演談あり、又種々の餘興ありて一同十二分の歡を盡し、九時過散會せり

七月二十四日 晴雨不定午前は齋藤、新井、松本三師前日の續講あり午後は吉田村上兩學士前日の續講ありたり

午後二時より新井に於ける演説會に、齋藤、新井、祥雲の三師出張し、新井師の「念佛禪師」齋藤師の「吾人の第一義」祥雲學士の「信仰の力」と題する演説あり、終つて茶話會を開き各師又談話あり、頗る盛會なりき

午後六時村上博士來着せり

七月二十五日 晴雨不定、午前は松本齋藤二師前日の續講、及村上博士の「坐禪と念佛の異同」と題する講演あり、午後教育講習は吉田學士前日の續講、及虎石學士の「學教の 教育的價值」と題する講演ありたり、村上博士の老熟なる、虎石學士の慎重なる俱に會場に異彩を放てりと云ふべし

午後一時高田町に出張講演會を開き村上博士の「國家と宗教」祥雲學士の「佛陀と [p.21] 衆生」と題する熱誠なる講演あり、終つて茶話會を開き村上博士の「心靈修養」と題する談話あり、其盛會なりしは記する迄もなし

又午後一時より諏訪に於ける出張演説會は新井、祥雲晚成の二師出張道路險惡車通せず、雨中洗足徒歩して往還せり、新井師の「佛教倫理の一般」祥雲師の佛教徒の覺悟」と題する演説あり、終つて茶話會を開く、邊地に有り得べからざる盛會なりき

祥雲學士は高田演説會終了後午後三時出立歸京の途に上り村上學士は朝新瀧に向ふて出立せり

七月二十六日 半晴、午前八時より國分寺に於て開 [閉] 會し村上博士前日の續講あり終つて、午前十時より開 [閉] 會式を執行す、其順序左の

如し

- 一、 奏樂
- 二、 本部幹事閉會の辭
- 三、 地方委員長祝辭
- 四、 講習生惣代井上信翁氏の答辭

[p.22]

- 五、 新井、齋藤、村上三師の演説
- 六、 祝電の披露
- 七、 奏樂
- 八、 萬歳三唱

本日臨席講師は村上松本兩博士、吉田學士新井齋藤二師にして、來賓其他來會者無慮四百餘名、新井師の「三心」齋藤師の「如何なる所にか心を止むべき」村上博士の「講習會所感」と題する演説は頗る來會者の注意を喚起せり、式の全く了りしは正午にして、夫より一同撮影せり

吉田學士は正午出發郷里長野に向ひ、新井師は午後二時出發新潟に向へり又松本、村上兩博士は夕刻乗船能登和倉なる西部講習會に赴けり、又曾我師は午後同郡の郷里に向ひて出立せり

夕刻より直江津に於て地方委員の發起に係る慰勞會あり本部よりは新保幹事虎石學士祥雲小野の四氏出席し席上發起者の謝辭、新保幹事の答辭、虎石學士の講習會所感及地方委員數番の演説あり、最後に小野氏の講習會に對する批評演 [p.23] 説ありたり、來會者六十餘名歡談時を移し、午後八時互に訣別を序して散會せり

七月二十七日 晴、炎熱燒くが如し、小野、祥雲二氏は一番列車にて東西に分れて出立し、新保虎石兩氏は殘務を整理し十一時發にて東西に分れ歸れり

本會出席講師¹¹

第十二回夏期講習會に來會せられ宗教又は教育講話の勞を取られし諸講師

¹¹ 明治37年に刊行された、この貴重な『佛教講話録』の卷末には、この「本會出席講師」のリストに続いては、「本會事務所係員姓名」、「開設事務所地方係員姓名」が記されている。さらにそれに続いては、「第十二回夏期講習會寄附金名簿(本部ノ分)」等、「第十二回夏期講習會來會者名簿(本部へ申込の分) & (地方事務所へ申込の分)」の後、「寄附金明細表(地方事務所への分)」が映画のエンドロールのように延々と掲載さ

の現住所左の如し

	麻布區日ヶ窪	大内青巒
	小石川區林町	村上專精
	赤坂區臺町四十七法安寺	黒田眞洞
	本郷區西方町十	前田慧雲
	本郷區東片町百三十五	松本文三郎
(p.24)	本郷區丸山新町二十四	齋藤唯信
	麴町區中六番町六	島地默雷
	本郷區森川町一	近角常觀
	越後國南魚沼郡三和村	新井石禪
	芝區南寺町南臺寺方	忽滑谷快天
	小石川區水道橋二丁目三十二	吉田靜致
	小石川區戸崎町	加藤玄智
	小石川區原町三十	和田鼎
	本郷區曙町七	虎石惠實
	小石川區林町三十	村上龍英

れているのには驚かされる。また「第十二回夏期講習會來會者名簿(本部へ申込の分)」の第20番目に「越後國高田春日町 眞宗大學 金子大榮」とあるのを目にすると、「やはり参加していたね」と、ついになまりとしてしまった。菊村 [1975] には、「清沢は、眞宗大学の学監になって上京してきた。金子も、その一回生として、この師に出逢うのである。いらい、日本の仏教界に「清沢・曾我・金子」といわれるラインを形づくるが、しかし、意外なことに、金子は、清沢から直接教えを受けたことはなかった。ただ講堂で訓示を受けたことがある程度……と話している。とはいえ、深い影響というものは、時代を超えるものに違いない。清沢満之が亡くなったのは、一九〇三(明治三十六)年六月のことである。金子が上京した年から、わずか二年足らずでみまかっているのだ……。」(24頁)とある。清沢が没した翌月に開催された夏期講習会である。因みに「曾我」とは曾我量深、「本會事務所係員姓名」の「接待係」として名前が挙がっている。